【69】

氏　名（本籍）	印南　　洋（愛媛県）
学位の種類	博　　士（言語学）
学位記番号	博　甲　第　4209　号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	The Effects of Task Types on Listening Test Performance：A Quantitative and Qualitative Study （タスク形式がリスニングテストパフォーマンスに及ぼす影響：量的および質的分析を通じて）

主　査	筑波大学教授		望　月　昭　彦
副　査	筑波大学助教授		久保田　　章
副　査	筑波大学助教授		磐　崎　弘　貞
副　査	筑波大学助教授		卯　城　祐　司
副　査	筑波大学助教授	Ed. D.（英語教育学）	平　井　明　代
副　査	神田外語大学大学院言語科学研究科教授	Ph. D.（応用言語学）	小　林　美代子

論文の内容の要旨

本論文は，タスク形式がリスニングテストパフォーマンスに与える影響を2つの量的研究（テスト得点の違いに焦点）および1つの質的研究（受験者の解答過程の違いに焦点）を通じて調べたものである。

第1章では，評価の重要性を検討し，特に，タスク形式に焦点を当てた研究の必要性を説いて，本研究の意義を述べている。第2章では，先行研究を妥当性などの点から述べ，熟達度の定義が多様で研究結果の比較が困難である等の先行研究の問題点を挙げている。第3章では，第1の量的研究および，質的研究の研究方法を概観している。本研究で使用する2種類のリスニングテスト－1つはリスニング熟達度を測るテスト，他方はタスク形式を変えたリスニングテスト（多肢選択式［MC］，記述式［OE］，要約穴埋め式［SG］）－を説明している。第4章では，これら2種類のテストの本研究における適切性を調べるためにMessick（1996）の枠組みを使用し，適切性の証拠を提示している。

第5章では，第1の量的研究の結果を吟味し，以下の3点を述べている。第1に，MCはOE・SGよりも常に容易であった。第2に，より難しいテキストではOEはSGよりも常に容易であった。第3に，より容易なテキストでは受験者の熟達度が低い場合，OEはSGよりも容易であり，受験者の熟達度が高い場合，OEとSGの難易度は同じであった。したがって，記述式と要約穴埋め式の難易度順はテキストの難易度と受験者の熟達度によって変わった。1点目・2点目は受験者のリスニング熟達度に関わらず見られた。

第6章では，質的研究の結果を正答者･誤答者ごとに吟味し，以下の各3点を述べている。正答者の場合，第1に，MCでは正答に関する情報を含む文，誤答に関する情報を含む文の両方を使用した。第2に，MCでは誤答に関する情報を含む文のみを使用し，消去法で解答した。第3に，OEおよびSGでは，正答に関する情報を含む文を常に使用し，誤答に関する情報を含む文の使用は時折であった。1点目は受験者のリスニング熟達度に関わらず見られ，2点目は受験者の熟達度が低いほど見られ，3点目は受験者の熟達度が高

い場合のみに見られた。誤答者の場合，第1に，タスク形式に関わらず，正答に関する情報を含む文を聞き逃した。第2に，OE・SGにおいて，正答となる単語を正しく聞き取ることができなかった。第3に，MCにおいて，正答となる単語を正しく聞き取ることができた場合であっても，それをテキスト内の他の情報と関連付けることができないために誤答に至る場合が見られた。1点目は受験者のリスニング熟達度に関わらず見られ，2点目は受験者の熟達度が高い場合のみに見られ，3点目は，一部の熟達度の受験者のみに見られた。正答者・誤答者のこれらの結果に基づき，より多くの情報を理解する能力を見たい場合，MCが好ましいと思われる。ただ，MCを解く際，受験者の熟達度が低い場合に，誤答に関する情報を含む文のみを使用し，消去法で解答することが見られる。この場合，正答できたとは言え，受験者は正答に関する情報を含む文を聞き取ることができずに正答に至っている。もし，受験者が正答に関する情報を含む文を正しく聞き取る能力をテストで測定したい場合には，MCの使用は受験者の熟達度が高い場合に限るべきかもしれない。また，受験者の熟達度が高い場合は，OEおよびSGの使用も考えられる。しかし，これら2形式において正答に関する情報を含む文は常に使用されるが，誤答に関する情報を含む文の使用は時折であったことから，両方の情報を含む文を使用する能力を測定したい場合には，MCの使用が好ましいと思われる。

第7章では，第2の量的研究の結果を報告している。データベースなどから抽出された3件の研究および，第5章のデータの総計4件の研究に含まれる情報を再分析し，メタ分析という統計手法を用い統合を行った。分析結果はCohen（1988）に基づき，タスク形式の影響を「小未満，小，中，大」の点から解釈した。その結果分かったことは，以下の3点である。第1に，タスク形式の影響は常に見られ，MCはOE・SGよりも常に容易であり，OEはSGよりも常に容易であった。より具体的には，MCとOEのどちらのタスク形式を用いるかによって，大きい程度得点が異なり，このタスク形式による得点の違いの程度は，OEとSGによる得点の違いの程度（小から中程度）よりも大きかった。したがって，MCとOEはOEとSGよりも異なっていると言える。第2に，タスク形式の影響は，受験者の熟達度レベルに関わらず全体的に共通して見られた。しかし，熟達度の低い受験者はOE・SGのどちらのタスク形式を用いても，より影響を受けにくかった。第3に，OEとSGのどちらのタスク形式を用いるかで生じる得点差の程度は，設問部と正答部が同一の文内にある場合において，設問部と正答部が同一の段落内にある場合よりも大きかった。

第8章では，本論文で扱った3つの研究を比較して分かったことを3点述べている。第1に，MCとOEは異なる能力を測っていると言える。第2に，OEとSGはテスト得点および受験者の解答過程の点から全体的に似ていることが多く見られた。第3に，3種類のタスク形式の影響は見られたことから，構成概念の定義と解釈においては，受験者の能力とテスト内のコンテクストの両方がパフォーマンスに反映するという考え方を支持している。

第9章では，本論文で扱った3つの研究の結果を研究ごとに再度まとめている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，受験者のテストパフォーマンス（＝テスト得点）に影響を与える要因の中のタスク形式に焦点を当てた先行研究はあるが，それらの研究は問題点があるために，タスク形式の具体的影響は不明であるということに着眼し，日本人大学生を対象として，タスク形式がリスニングテストパフォーマンスに与える影響を調べることを目的として，2つの量的研究（テスト得点の違いに焦点）および1つの質的研究（受験者の解答過程の違いに焦点）を実施して，詳細かつ精密に分析したものである。

量的研究を2つ実施したが，第1の量的研究では，468人の日本人大学生を対象にリスニング熟達度テストと3つのタスク形式からなるリスニングテスト（多肢選択式（MC），記述式（OE），要約穴埋め式（SG））を実施した。先ず，Messick（1996）に基づいてそれらのテストの妥当性検証を行い，それらが全て全体的

に適切性が高いことを証明したが，証拠に基づくこの妥当性検証の方法は，明確で説得性があるものである。この第 1 の量的研究の結果，テキストの難易度と熟達度の関係について，受験者のリスニング熟達度に関わらず，MC は OE・SG よりも常に容易であること，又，OE と SG についてはテキストの難易度は受験者の熟達度によって異なること等がわかった。ケンブリッジ英検を使い，受験者のリスニング熟達度とタスク形式の関係が明確にされたことは本研究の優れた点である。

質的研究については，104 人もの多数の日本人大学生を対象にして，リスニングテストの解答中に考えていたことを口頭で報告するプロトコルという手法で資料を集め，文字化して正答者の場合と誤答者の場合に分けて分析したが，大変，時間のかかる文字化の仕事を丁寧に行い分析したことは，特筆に値する。分析の結果，正答者と誤答者の解答の過程が異なり，正答者の場合，受験者の熟達度の程度に関係なく MC では，正答に関する情報を含む文，誤答に関する情報を含む文の両方を使用したこと，受験者の熟達度が低いほど MC において消去法で解答したこと等がわかった。誤答者の場合，受験者の熟達度の程度に関係なく正答に関する情報を聞き取れなかったことなどが分かった。この結果から，受験者の熟達度が高い場合，又，正答及び誤答の情報を含む文を使用する能力を測定したい場合，MC を使うことが望ましいという指摘は英語教育で利用できる。

量的研究の 2 つ目は，データベースなどから抽出された 3 件の研究および，第 5 章のデータの総計 4 件の研究に含まれる情報を再分析し統合して分析するメタ分析を行った。その結果，わかったことは，タスク形式の影響は常に見られ，MC は OE・SG よりも常に容易であり，OE は SG よりも常に容易であったこと，タスク形式の影響は，受験者の熟達度レベルに関わらず全体的に共通して見られたことなどであった。この分析方法により過去の研究を同じ基準で比較検討して得られた結果は，大変，興味深いものである。

本研究の独創的な点は，メタ分析という手法を用い，テスト形式の影響について複数の研究を数量的に比較検証していることである。又，本研究の優れた点は，第 1 に，学習者の熟達度の指標として世界中で広く使われているケンブリッジ英検を使用し，客観的な明確な分析結果を提示したこと，第 2 に，リスニングテストにおけるタスク形式の比較を，受験者の解答過程から調べたこと，更に，同分野の先行研究の被験者はせいぜい 10 人程度であるのに対して，本研究では 104 人という大勢のデータに基づいていることである。以上の点で本研究は言語評価の分野に少なからぬ意義を有し，労作であると言える。しかし，若干の手直しと工夫が必要であろう。第一には，日本の中学生，高校生，大学生への具体的な指導方法の提言が欠けている。第二に，結論の部分は，書き方に工夫が必要であり，新しい発見事項をしっかり述べるとよかった。第三に，妥当性検証の部分で方法と結果の部分の書き方が混在していたので，工夫が必要である。このような点を改善し，一層の精査と考察と工夫を施すことによって，学術論文として完成度が一層高まることを期待したい。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。